

総合診療科・地域医療実習への SDH教育プログラム導入の取り組み

第73回医学教育セミナーとワークショップin愛知学院大学

ワークショップ8

既存のカリキュラムで「健康格差の社会的決定要因（SDH）」を教える・学ぶ

2019年8月10日

筑波大学医学医療系・総合診療科 小曾根 早知子

内容

1. 「既存のカリキュラム」
筑波大学総合診療科・地域医療臨床実習
2. 臨床実習へのSDH教育プログラム導入
3. アウトカム／今後の展望

筑波大学総合診療科・地域医療 臨床実習

- 医学生の必修の臨床実習として、総合診療科・地域医療実習を実施していた。
- 2017年度より、医学5－6年生を対象に4週間の必修の実習となった。
- 大学病院総合診療科1週間
 - + 地域診療所・小病院 1－2週間
 - + 地域医療実習（神栖または北茨城）1週間
 - + 地域中核病院 0－1週間

総合診療科実習施設一覧



- 15 - 17人/4週、それぞれ各施設に分かれて実習

4週間の実習スケジュール

- 1週目初日：オリエンテーション@大学
- 1週目2日目～4週目4日目：各施設で実習
- 4週目最終日：総括@大学

SDH教育プログラム

- 1週目初日：オリエンテーション@大学
ケースを用いたレクチャー、
4週間での課題、参考資料配布
- 1週目2日目～4週目4日目：各施設で実習
4週間での課題の実施
- 4週目最終日：総括@大学
課題に基づきSDH事例発表会、最終レポート

1週目初日：オリエンテーション

- ケースを用いたSDHレクチャー
- 課題：
「4週間の実習で出会った人に対して、健康に影響を与える背景要因について情報収集、考察すること」
- 配布資料：WHOによるSolid Facts 第2版

WHO:健康決定要因

～医療概論Ⅲ「ライフサイクルからみたヘルスプロモーション」
講義（吉本尚先生）より

- ・ 社会格差
- ・ ストレス
- ・ 幼少期
- ・ 社会的排除
- ・ 労働
- ・ 失業
- ・ 社会的支援
- ・ 薬物依存
- ・ 食品・食生活
- ・ 交通

テキスト資料 第2部 P58参照

WHO健康都市研究協力センター、日本健康都市学会
健康の社会的決定要因 確かな事実の探求 第2版

<http://www.tmd.ac.jp/med/hlth/whocc/pdf/solidfacts2nd.pdf>



4週目最終日：総括@大学

- SDH事例発表会：

学生3-4人＋ファシリテータ（教員）1人に分かれて
発表、質疑応答（1人10分程度、全体で1時間）

- 最終レポート：

自身の取り組んだ課題と事例発表会に基づき、

「医療者がSDHを意識する意義」

「地域において医療者が地域の健康を支えるため

に果たすべき役割」を記載

学生によるSDH発表事例の例

1) どんな方か？その方と自分との接点：1歳2ヶ月の男児（骨形成不全症があり整形外科通院中）と20歳の母親、訪問看護に同行して出会った。男児は頸定6ヶ月、起立不能と発達の遅れがある。ベビーベッドからの転落歴あり。

2) その方の健康に影響を与えている背景要因について収集した情報：

幼少期；まさに今が幼少期であり、父親が再婚、母親はもともと水商売に従事、父親と不倫関係だった。母親の子供への愛着はありそうだが、育児に知識不足が大きい。転落エピソードはアプローチが必要。

社会的支援：訪問看護が唯一の社会とのつながりになっている

薬物：母親がアイコス使用

食品：離乳が全く進んでいない。ミルクのみ。

3) まだ把握していないことのうち健康に影響を与えているかもしれない要因：

社会的排除：父親に前妻との間の子供がいる→養育費を払っているかも？母親は働いておらず、貧困の問題がありそう。

母親の幼少期の問題→現在の母親の健康へ影響しているかも。

4) 現場で健康のSDHにアプローチしていた場面：訪問看護師が、子供のケアだけでなく、母親を含めた生活全般に情報収集、支援についてアプローチしていた。

5) 感想、学んだこと：気がつくところの子供の今の生活だけでなく、生まれる前～今後のことまでを想像しながら、話を聞いていたことに気づいた。

事例発表会

- 大多数の学生が、経験した症例について意欲的に語ってくれた。
- 多くの学生が住環境、介護問題、食事、交通などに注目し、生物モデルとは異なる視点で患者家族の状況を捉えようと努力していた。
- 現状の横断的評価にとどまる学生が多かったため、今後の課題は、ファシリテーターがSDHの視点に注目を促し、学生の考察を深めること。

最終レポート

- 「生物－心理－社会モデル」の視点で患者や地域の課題を捉えられた学生は多かった。
- 時間軸を意識した視点や、制度・社会背景などにまで繋げた考察をできる学生は、全体の1割程度に留まった。
- **Health advocate**としての意識を持った内容まで記載できた学生は全体で**1－2名**だった。

まとめ

- 既存の総合診療科・地域医療実習での実績を元に、必修の実習の中にSDH教育プログラム導入を試みている。
- 多くの学生が生物モデルより広い視点は持てたものの、時間軸・社会制度にまで繋げた視点でSDHを理解できている学生は少数に留まった。
- 今後の課題は、教員FDなどを通して、現場教育と事例発表会での振り返りの質を上げ、学生のSDHへの理解を深めることだと考えた。